

論文以外のコンテンツ

雑誌名	井上円了研究
巻	2
発行年	1984-03-14
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00006759/



井上円了研究

2

井上円了の「教育」理念序説……………	飯 島 宗 享
井上円了の思想……………	小 林 忠 秀
井上円了と河口慧海……………	高 橋 統 一
井上円了と蓮門教……………	西 山 茂
「南船北馬」現地調査覚書(続編)……………	田 中 菊次郎
〔再録〕政教社のナショナリズムと井上円了の「護国愛理」 ……………	田 中 菊次郎
調査報告・井上円了略年譜・研究会日誌	

井上円了研究

2

東洋大学

井上円了研究会

第三部会

目次

井上田了の「教育」理念序説……………	飯島宗享……………	3
井上田了の思想……………	小林忠秀……………	19
政教社のナシヨナリズムと井上田了の「護国愛理」(再録)……………	田中菊次郎……………	35
井上田了と河口慧海……………	高橋統一……………	85
井上田了と蓮門教……………	西山茂……………	95
「南船北馬」現地調査覚書(続編)……………	田中菊次郎……………	101
東洋大学第一期生佐々木正瀬氏談「井上田了とその時代」……………		115
井上田了略年譜……………	三浦節夫編……………	127
研究会日誌……………		183
あとがき……………		188

東洋大学第一期生

佐々木正瀨氏談

「井上円了とその時代」

寺の創建 私のところは、浄土真宗本願寺派の摂護寺と言います。私は明治二十年に京都で生まれました。九十才です。(昭和五十七年当時) 京都で生まれて、一歳の時にこっち(都城)に連れてこられました。

ここは明治十年頃説教所ができていまして、十六年に寺号が下附されました。それで、いよいよ寺ができることになって、こっちの檀信徒が住職をしてくれと父に頼みにきました。父は鹿児島県の所長として京都から赴任してきていましたが、その時分は鹿児島からここまで来るには、鹿児島から船に乗りまして、福山という所へ着いて、馬に乗って来にやならん。「あんな便利の悪い所へ、わしは行かん」というて、父は嫌っておったんです。と

ところが因縁でしょう。大洲鉄然さんが宗務総長をしておって、「あれほど懇望するから行つてやったらどうか」というので、「それじゃ行きましようか」と、明治二十年にこっちへ下つてくることになったわけです。

私はその時につれてこられて、ここで育ったんです。

父の名は佐々木鶴熙です。父はね、大洲さんの四天王の一人といわれた子分ですから、非常に勤皇で、幕府の方から始終追われておったのです。それで身を隠して暫く「伊勢田」という姓を名乗っておったことがあるんです。それで鹿児島に下つて来た時は伊勢田で下つて来ておるんですね。こんな話は父から聞いたことはございません。書いた物を、色々書いた物が残ってますので、この寺が開創百年になりますので、今百年史を作っておるんで分ったんです。島津藩では念仏は全部禁止でしたから、かくれ念仏の洞穴がありますが、ここから一里半位の所に今でもたくさんお参りがあります。明治になって門徒が名乗って出て、その人たちが寺を創ったといういきさつです。

哲学館入学の動機

私は初めから哲学館へいくと決めていました。というのは、宮崎に安楽寺というお寺があります、その住職の息子さんが哲学館に入っておつて、そのお父さんが、「あそこがいいよ」としきりに勧められるものだから、うちの父も、「そんなら行け」というので、安楽寺の弘中さんをたよって行きました。もうひとつ動機もありました。

ちょうど中学の卒業の時に、井上先生がこっちへ講演においてになりました、中学校で幽霊の話をされました。そういうようなことから、哲学館に行くという気持ちになって、哲学館に入ったんです。今の龍谷大学は、その時分は仏教大学といっておつたです。あそこに行きたくないんですな、宗門大学だからというよりも、何か虫が好かんのですな。

そして入ったんですが、その時分にがたがたしておつて、学長が変わるとか変わらんとかいいう話で、途中で哲学館やめました。そして他のある塾に通うて、哲学館をやめて三年後に東洋大学の第一回生に入ったんです。そ

の時分は、東京まで五日かかりました。人吉まで馬車で行って、人吉から川舟で八代へ出て、八代から汽車に乗っていったんです。汽車賃が三十円くらいでした。人吉まで馬車で行きますから、どうしても途中で一泊せにやなりません。馬車ですから一日十二・三里しか行けません。朝六時頃出て、夕方。それで二日。汽車も特急ありませんし、のろろ汽車ですから。円了先生もやっぱりそんなふうで、学校に馬車で一日かかっておこしになったんです。

当時の学生生活

当時の学生数は百五十人ぐらいじゃなかったでしょうか、二百とか言いよつたですけど。よく勉強はしましたな。女もなければ何もなしですから。私は本郷の赤門通つて少し向こうに下宿しておつて、二、三年前に死にました乃村龍澄（のむら 龍澄）という、彼も一緒におりました。乃村龍澄君は死ぬ前に京都の大覚寺の門跡になっておりました。生活は質素です、遊ぶといつても、何もなかったですね、夜店に行くぐらいのことです。その当時はバスがあるわけじゃなし、車があるわけじゃな

しね、どこへ行くにも歩いて行きよったです。神田や浅草行くにも、何処行くにも。若い時ですから、やっぱり元氣まかせに行きよったですねえ。食事も下宿で食べて行くぐらいいで、今のように食堂もあちらこちらにありませんし、まあちよっと寄るのは、牛乳飲むところぐらいのことです。喫茶店というても、今のような喫茶店とは違って、牛乳ぐらい飲ませるぐらいのことでした。月謝が二円ぐらいいで、下宿料が七、八円ぐらいいでしたから、私らが家から十四、五円貰いよったです。私は仕送りの一番少なかった方です。ふつうの人が十八円か二十円貰いよったです。

その当時の東洋大学は、第一種、第二種とわかれていました。その時分は高野山大学を出てきたような人や日蓮宗の人というような、他宗派の学校を出てきた人が入ってきました。坊さんの子が多かったです。真宗の人は高田派の人が一人おっただけでありました。一種というのは主に哲学方面をしたわけで、寺の人が多かったです。二種は国漢の方で、一般の人も多かったようです。

一種には三十人ぐらいおりまして、二種は四十人ぐらいおったでしょう。帝大の専科に移ったような人もありまして、また途中でやめた人もありまして、卒業した時は一種が十二名でしたかな。当時の学生は、坊さんが多いですから、どうしても坊さんらしいところがあります。今と違って野球とかの運動もなかったですし、悪く言えば元氣がなかったですね。おとなしい方でしょう。慎み深いというような点が多少あったでしょう。それで、他の大学の学生とくらべて、私らは割合に、真面目であつたと思うのです。そのころ、真面目な学校じゃという評は相当になってましたしね。それはそうでしょう。余り傑物も出ん代りに、悪いことをする者もおらず、東京辺じゃお坊さんの学校みたいように思うとったんじゃないですか。京都の仏教関係の大学と較べると、京都気分と東京気分と違うぐらいいのものはありました。京都辺は悠長な点がありますし、東京辺と言いますと意氣軒昂というふうなふうで、多少そういう傾向がありました。

哲学館事件 哲学館大学を東洋大学と変えたことにつ

いては、どうしてそんな大きな名を付けたんだろうかと話しあったのですが、大学側からの説明は何もなかったです。

当時、哲学を研究するには、あそこ（東洋大学）より他ないというふうでした。だから私なんかも印度哲学や哲学を研究しようというふうな、そして哲学というのは難しいような気持ちでした。それで、入学してよかったという気持ちでした。

また、いい先生達がおられたということもあります。

学長の前田慧雲先生が天台を、高楠順次郎先生が印度哲学、それから島地大等氏が真宗学、仏教史は境野黄洋さん、倫理は中島徳造先生でした。境野黄洋先生は原稿なしでどんどん講義されまして、年号でも何でもよく憶えているもんだと感心しました。前田先生には「習ろうた」気がしました。大学の門の所に高島米峰さんが本屋を出してありました。教科書とか色々な雑誌とか販売していました。店に入って買わずに帰ると怒りよかったです。「ひやかしに来た」言うて。

私の入学後から在学中は、明治三十八年に戦争が終りましたから、日露戦争とそのあとのちょうど景気の悪い時でした。哲学館事件は、私も知っていました。教員免許は出るようになっていました。

この哲学館事件の中島徳造さんの講義は一番面白かったです。私が入った当座の哲学館時代ではですね。それは、雄弁で、悪口屋だったですね。「伊藤博文の胸にさしてゐる勲章は罪惡の塊。犬がうんこをしたのに水が張ったようなもんじゃ」というようなことばかり得意になって言うようになりました。そういう悪口を言う人でした。それで、今はおかしいと思いますけども、その時分は、中島さんの言い過ぎだと思ったですね。時代が時代ですから、先生の言い過ぎでなかったらうかと思いました。

井上円了の印象 私のはじめて井上円了先生にお会いしたのは、日露戦争の終わった後だったでしょう。中学校卒業間近の時、都城中学校に來られて、うち（撰護寺）へお泊りになった時です。中学校で講演されまして、幽霊や靈魂の話をしておられました。どこでこんな幽霊が出

た、こういうことがあった、というように面白半分に聞いちゃったですね。面白い先生やと思っていました。ここでは一般の人むけのお話でしたけれど、他の話は憶えてません。

このあと哲学館大学・東洋大学に入ってから講演を聞いただけで、講義は聞いていません。私が大学へ入ったときは、井上田了先生は大学をお辞めになって、出てこれなかったです。大学では教室などへはほとんど顔を見せられませんでした。学校で個人的にはちょいちょいとお話をしてくれました。

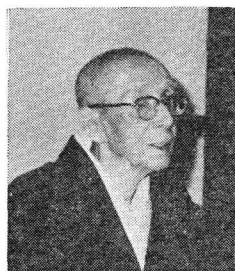
先生は小肥りで、背は余り高くなくて、どっちかというと話は下手な方でした。下手というたら悪いが、何と言いますか、面白くない。どちらかと言うと訥弁の人でした。ぼつりぼつり話をする人でした。前田先生も余り雄弁じゃなかったです。「それで、ええー、ええー」というようなふうな話でして、実のある話はしておられたですね。

哲学堂ができるとき、土運びさせられて、加勢に行っ

たもんです。あの頃あそこで先生の話を承ったですねえ。そのころは、哲学堂といっても、違い人を祀る庭というぐらいのことで、四聖を祀る御堂ができるというような気持でした。若い時ですから、宗教的な気持もなく、ただ面白半分でした。

大学をお辞めになったことについて、息子さんが何とかいう話はありよかったです。できが悪いとかで、「自分の子供さえ教育のできません者が、私らを教育できる道理はない」というようなことでした。そういうことも承ってましたが、「それだから責任を感じる」「私は辞める」とかいうような話を聞いておりましたけれども、若い時ですから、そういうことは余り気にしなかったです。

この寺にお泊りになったか、ちよつと憶えています。まだこっちは十八、九で、父もおり兄もおった時ですから、ただお目にかかって、「貴方^{あなた}、寺の坊っちゃんか」というぐらいのことじゃったですからね。はじめは学校に入りましてお礼にうかがったりしまして、井上先生も知っておいになるもんですから、丁寧に挨拶して

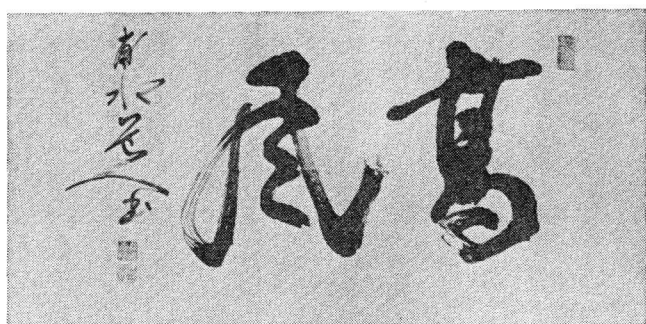


佐々木正熙氏

うございました」と戴いただけです。学生の時ですから、まだお礼をするとか言っても金もなし、「ありがとう」ということだけでした。

下さったりして……。私ははじめに哲学館におったんですから、先生によくお会いしたことあるわけなんです。東洋大学になってからは、余りお見えになりませんですから学生の中には、井上先生を全然知らん人が多かったです。哲学館におった人はよく知ってましようねえ。この書（下段のもの）は先生にお願ひしたら書いて下さったんです。都城へ来られたことありますから、そういう関係で、「よう学校に入ってきたなあ」「よう世話になったなあ」というて喜んで下さいました。「先生何かひとつ記念に書いて下さい」って、お宅を訪ねてお願いしたんです。東京では何べんもお会いしました。「書いておいたよ」とおっしゃるぐらいのことで、「ありがと

られませんでしたね。奥さんもやさしい人でした。はっきり憶えませんが、余りりっぱな家じゃなかったような感じがするですね。経済には困っておられたようでした。



佐々木氏所蔵の円了の書

井上円了先生は気難しい顔はしておられたですけど、お宅で会うとみるとやさしい方でした。見掛けはちよつとこうむつりした方で、とりつきにくい方でしたが、親切なやさしい方でしたよ。こつちが大学生で若いですから、難しい話はせ

私が二度目に入ったのは東洋大学で、何もわからんで進んでしまったです。夢のように進んでしまったです。

だから、先生のことと東洋大学のことには私には余り直接に結びつきません。

戦後の教団改革 東洋大学を卒業しても真宗学は余りに合いません。それで私は卒業して、京都に行きまして龍谷大学の聴講生になって、少し真宗学をやり直しました。それからしばらく家に帰っておりまして、今度は門司の本願寺派の鎮西女学校の講師をしていて、三年ぐらいおりました。それから寺にもどりました。

広島に爆弾が落ちた時にここにも落ちまして、全部焼きました。本堂から書院、書庫まで、その一部が残っただけでした。敗戦の年の八月六日です。そして一週間ぐらいするともう終戦になりました。

私の長男が東大の印哲を出て、ちょうどあの梅原真隆氏の息子さんなどと一緒ですが、何年ごろになりますかしら、生きておると六十四ぐらいになりますか。死にました。戦争行つて、肋膜炎を起こしまして、それから、そ

れが高じて肺結核になりました、今でしたら肋膜炎を手術できるんですが、その時分はお医者様はろくに……。二十二年に死にました。続いてその翌月、家内が死にましたし、そうしてまた続いて次男が死にました。次男は京都の会社に入っていました、庶務課長になってましたが、これが胃癌で手術をして死にましてですね。あれはまだ三十七、八でしたらうか。ずうっと上から順に死にましたです。三男は兵隊に行つて目を撃たれて、それで死にましたし、その次の子は龍大卒業して、ちょうど本願寺から支那の開教やるのに医学の心得がなきゃいかんということで、青島の医学校に二人選抜して遣りまして、卒業間際に上海の方に友達と視察に行きまして、向こうで死にました。

今跡を取っているのは五男です。これは坊主になるつもりではなくて、ある会社に入っていたのを、皆死んだもんですから、呼びもどして、また龍大の専門科に入れますして、そして跡を継がせることにしたんです。

こんな不幸つづきのころ、突然臨時宗会が開かれて、

私は議員でしたから京都へ上りました。その時の総長が佐賀出身の千葉という人です。そのころ、進駐軍の海軍のアンダーソンというのと宗教課長とが、毎日本願寺と龍大に来て、「本願寺は民主化せえ」ということを言いに、毎日のようにやって来た。それで千葉総長が十ヶ条の覚書を書いて出したんですね。まず第一に連枝制度廃止、まあ皇族廃止ということと同じです。僧の身分等級廃止、寺の堂班廃止というなことで、十ヶ条程覚書を出して、よかろうというわけで、ところがうち（西本願寺）帰って会議開いてみると通らんのですよ。どれもこれも反対が多く、宗会を開いてもいかんのです。総長はとうとう神経衰弱を起こしてもうて、突然辞表を出したんです。そこで臨時宗会が開かれて、後の総長を選出しなければならんということになりました、その時に因らずも私が選出されたんです。

お断わりしたんですけれども、ちょうど寺が焼けた後で、再建せにやならんので家は出られなかったんですけれども、やむなくお受けをして、それではこの覚書が通

過をしたらすぐ辞めるからという約束の下にお受けをしたんです。だから中々議論百出で、とうとう宗会を解散しまして、そして半分ほど議員が入れ替って、その次の新しい議員によってようやく通過させたんです。その時分に、総務（国の大臣にあたる）は宗会議員から選ばれたんですよ。それぞれの各派から一人で、二、三人ずつ選びよった。その時分私がお受けする時に、私は勝手に選ぶから、それを許して貰いたい。それができねば、総長をお受けをせん。自薦他薦お断りする。私の勝手に選ばせて貰いたいということを条件にしました。そういう条件が入れたらもんですから、お受けしたわけです。そして、野にありまして元本山の部長やかつて教務部長しておった人など、二人を選んで総務になってもいいました。それで他の宗会議員の連中は反対しましてねえ。野におった者を引っ張り出して、宗会議員から選ばんとはけしからんと、攻撃受けたもんですけれどもね。それで二年ほど経って辞表を出して帰ってきたんです。

私が辞めた後の総長は、堂班を廃止したんでは、財政

がもてんというようなことで復活させました。私が廃止した時に、この問題も起ったものですから、それでは「門徒講」というものをつくって、月に三十錢ずつ上げてもらおうということで決めて、門徒講ができたんで、それで堂班は廃止になったわけです。それで堂班が復活したから、「門徒講は廃止しなけりゃいかん」と私は言うたんですけど、それはそのままになって、二重に負担がくるわけですね。

私が辞めたあとに残ったのは連枝制度と相読講。門徒の人を議員にするということぐらいで、他の改革はすべて元へもどりました。今になるとこれもまた問題ですよ。

私の時は本願寺の議會を二院制度にしようと思ったんです。ところがGHQの宗教課が許さんのです。そりゃいけないと、真宗の性格に合わない。それでやつぱり一院制にしなければいかんと言いつつ、とにかく許可せんというのです。その時分は一も二ももう向う様のおっしゃる通りの時代でしたからね。

当時、東洋大学の出身者が三人程おりました。私より

ずっと後に出た人です。その時私を先輩としてむかえてくれました。彼らは今七十そこそこでしょう。

こんなこと言い切れないことですけれども、龍大出身の人の改革賛成は少のうございました。東洋大出身者は、まあそれは賛成しました。どう言いますかね、何となく気分が違うんですがね。自然にそういう気分がありますね。感情でしゅうかねえ。何かこう、反抗気分も多少あるような……。私はだいたい西六条（京都の本山）の空気は嫌いじゃったもんですから。何だか西六条の気持ちゅうのは陰鬱な、どう言うたらいいんでしょう、感情的に、何か口で言い表すことができないような気分がするんですね。それへの反抗気分があるんですね。井上田了先生の仏教改革の氣運とまではいかんでしょうが、何や口で言い表すことができないような……。六条に対する気分がね。私は、それが余り坊主臭いと言いますかね、何かそんな気持ちがあるんですが。

まあ、私の後に本願寺の宗會議員などをしておる人とか、この前參議院に出ました何とかいう、あの文学者は

東洋大の私らより二、三年後に出た人です。私が行った

時が哲学館の三年、和歌山あたりの真宗のお寺の人が二、三人おったですが、ちょうど私の時はいませんでした。

二、三年前は東京に行きました。藍綬褒章戴きまして、その時ちよつと東京に行き、日本の幼稚園の教育が百年になるといので文部省によられました。うちの幼稚園は今じゃ八十年ぐらいになります。宮崎県で一番初めにできまして、永い間幼稚園やつておったもんですから、褒章をいただきました。

このごろは、檀家廻りをすることもありますし、講演をたのまれてお話しに行くことが多うございます。昨日も、老人クラブに引つ張られました。三百名程の老人大学修了証を貰って集まつておりまして、その後に私が講演しました。私を紹介者が九十五じゃ言うたら、「わあ」と手を挙げて皆喜んでです。まあそんなもんですね。

私たちの同期は一人も生きていません。先輩、後輩、私たちの同窓や知った人は、皆死にましてねえ。寂しいですよ。子供の命を私が貰って長生きしておる。私らはもう

生ける屍で……。

(以上の談話は一九八一年二月一七日と一九八二年三月二七日の二回にわたる聞取り調査の結果をひとつに整理したものである。調査員は第一回が高木宏夫、三浦節夫、第二回は田中菊次郎、高木宏夫、三浦節夫である。なお、最後に井上円了の『南船北馬集』の中から、佐々木氏の談話と関係する部分を参考資料としてまとめた。枠内が転載部分であるが、枠外の数字は実際の頁数である。)

南 船 北 馬 集

第 貳 編

宮崎縣紀行(明治四十年三月下旬より同五月上旬まで)

大分縣紀行(同年五月上旬より六月下旬まで)

北海道西部及樺太紀行(同年七月下旬より八月下旬まで)

北海道西北部及北海道紀行(同年八月下旬より十月中旬まで)

北海道中部及東南部紀行(同年十月中旬より十一月下旬まで)

明治四十年度統計

豊前豊後紀行(明治四十一年一月下旬より三月中旬まで)

熊本縣紀行(同年三月中旬より六月下旬まで)

浦 水 井 上 圓 了

二十八日晴、早朝飢肥を發し、深く溪山の間に入り牛嶺の險路にかゝる、古木深く鎖し斧斤山に入らず、風光あらずから太古の趣あり、

亂峯堆裏樹葱々、路入白雲深處通、一鳥不啼山寂寞、又無桃李笑春風、

嶺頭に達する時、加藤無染氏の出で迎ふるに會す、降路隨行弘中氏の車顛覆せるも幸に無事なり、午後四時北諸縣郡都城町に着す、郡長喜多秀一郎氏、郡視學佐々木己之助氏等の市外に迎へらるゝあり、此日行程十三里なり、沖繩以來始めて斯る難道を見る、宿坊は願藏寺なり、

山路如蛇曲幾回、溪行數里望初開、平原漠々都城外、霧嶽衝天氣壯哉、

二十九日雨、午前都城中學校にて講演す、校長は御手洗學氏なり、午後願藏寺の軍人追吊會に出演す、聽衆堂に滿つ、住職は加藤無染氏なり、

三十日晴、午前高等小學校にて開演す、校長は土持幸平氏なり、午後願藏寺にて講話をなす、講演後更に車を驅りて、藤本覺讓氏と共に鹿兒島縣噲啖郡末吉村に至りて開會す、日已に暮る、會場は專德寺なり、書齋は芙蓉樓といふと開きて一詩を題す、

李白桃紅春已中、香雲送暖一庭風、芙蓉樓上高人在、端坐觀來色即空、

三十一日(日曜)雨、朝小學校にて講演す、末吉村長は若松良實氏なり、是より都城に歸り、攝護寺境内に設立せる天龍幼稚園の證書授與式に臨む、園長は同寺副住職佐々木芳照氏なり、庭園の設備其宜きを得たり、攝護寺は日薩隅三國中第一の大寺なり、佐々木豪熙氏之に住す、午後夜分兩度同寺に於て開演す、其間願藏寺に至りて一席の講話をなす、當夕攝護寺に泊す、幼稚園の所感一首あり、

都城開得幼稚園、幾百兒童喜色繁、異口唱來君代曲、聲々使人感天恩、

四月一日晴、鹿兒島縣贈喉郡財部村に至りて開會す、會場及宿泊所は願成寺なり、住職藤本覺讓氏は哲學館出身なる故を以て大に盡力あり、村長東郷實彦氏有志者池袋英太郎氏同宗正氏等皆盡力せられ、村尾郡視學も此に出張せらる、

三日晴、三股村に至りて開演す、會場は小學校にして村長は野崎重則氏なり、散會後亦都城に歸り攝護寺に宿す、當夕實業俱樂部に於て講話をなす、都城町長税所篤正氏、有志家黒岩常平氏、瀬戸山徳藏氏、外出八代吉氏等盡力あり、

四日雨、攝護寺に珍藏せらる、血書華嚴經を拜觀して、一詩を題す、

大德千年筆跡馨、看來字々現威靈、堪驚一滴鼻頭血、描出華嚴八十經、

當日午前山口村、午後高城村にて開演す、山口村長は新市武氏にして、高城村長は日高清貞氏なり、當夕又都城に歸り、有志の晚餐會に出席す、喜多郡長外數十名相會す、宿所は願藏寺なり、願藏寺は本堂新築正に成りて市中の一美觀となる、住職加藤無染氏は布教と開墾とに力を盡くすといへるを聞きて、一詩を賦す、

無染法師有道緣、大堂構得日南邊、身持二諦真兼俗、開得農田與佛田、
都城滯在中は攝護寺及願藏寺の厚意を辱うせるは深謝する所なり、

北諸縣郡	都城町	中學校	一席	五百人	中學校
同	同	小學校	一席	三百人	教育會
同	同	寺院	三席	八百人	戰死者追弔會
同	同	寺院	二席	五百人	町村有志
同	同	俱樂部	一席	百人	實業家

井上円了略年譜

三浦節夫編

この略年譜は、研究当初の昭和五十四年一月に、基礎資料のひとつとして、いくつかの年表や資料を編集し、手書きの形のコピーを第三部に配布したもので、要望により本書に収録した。

凡例

- 1 後述の年表や資料の中から井上円了に関する事項を選び出して整理した。
- 2 研究上の必要から、事項の欄の他に著作の欄を設けた。
- 3 引用文献を明記するために略符号を用い、できる限り主観的な判断を加えないように、つぎの原則にもとづいて記述した。
- 4 「大学入学ACMO」という記述は、「大学入学」の事実がACMOの文献に記載されていることを意味する。
- 5 年月日、内容、書名などで相違などがあつた場合は、カッコ内にそのことを明記した。
- 6 年月日が異なる場合は前出の時期のところに記述した。
- 7 また、より詳細な年月日が判明している場合は、その日付のところに記述した。
- 8 日付の分らないものは、その月のはじめに記述した。

9 月が不明のものはその年の末尾に記述した。

10 著作の欄については、事項の欄に準ずる形でまとめたが、事項の欄がない場合は新たに欄を設けた。

引用文献略符号表

- A 「井上四了先生年譜略」(東洋大学『東洋大学創立五十年史』、昭和十二年、五二三—五四三頁)。
- B 「東洋大学略年表」(東洋大学八十年史編纂委員会編『東洋大学八十年史』、昭和四十二年、九二五—九四九頁)。
- C 京北学園八十年史資料収集委員会編「井上四了先生年譜」(ガリ版刷)
- D 中尾祖應「先生の著述」(中尾祖應編『甫水論集』、博文館、明治三十五年、付録)。
- E 「故井上博士の略歴及著書」(『哲学雑誌』三八九号、七〇五—七〇七頁)。
- F 峰島旭雄「明治期における西洋哲学の受用と展開(一)」(『早稲田商学』二〇一号、七二—七三頁)。
- G 齊藤昭俊『近代仏教教育史』、国書刊行会、昭和五〇年、一七四—一七五頁。
- H 「海舟日記Ⅳ」(勝部貞長等編『勝海舟全集』第二一卷、勁草書房、昭和四八年)。
- I 開国百年記念文化事業会編『明治文化史』第四卷(思想・言論編)、洋々社、昭和三〇年、四八五—五三四頁。
- J 開国百年記念文化事業会編『明治文化史』第五卷(學術編)、洋々社、昭和二九年、七六一—八四〇頁。
- K 開国百年記念文化事業会編『明治文化史』第六卷(宗教編)、洋々社、昭和二九年、五三八—五七一頁。
- L 『明治文化全集』第一九卷(宗教編)、日本評論社、昭和四二年、五四七—五六六頁。
- M 『明治文学全集』第八〇卷(明治哲学思想集)、筑摩書房、昭和四九年、四三二—四三三頁(年譜)。
- N 『明治文学全集』第三卷(明治啓蒙思想集)、筑摩書房、昭和四二年、四六一—四七一頁(参考文献)。
- O 『明治文学全集』第八七卷(明治宗教文学集一)、筑摩書房、昭和四四年、四一三—四一四頁。

年月日	事	項	著	作	備考
一八五八年 2・4	(安政5年) 1歳 越後国三島郡浦村、真宗大谷派滋光寺住職井上円悟の長男として生まれる ACEMO。母大溪いくAE。幼名岸丸AMO (Cは「安政6年、戸籍上定政5年」、Aは「安政5年、但し陰暦。一説安政6年と曰う」)				のちに襲常(『老子による』)と改め得度後円了と称した。別号は甫水(出身地に因む)、なお非僧非俗道人、四聖堂、不思議庵、不知歌斎、無芸庵、拙筆居士などの号も用いたO
一八六七年	(慶応3年) 10歳 三島郡片貝村池津の石黒忠恵の漢学塾に学ぶACEMO。この頃に龍常と改名A				『周易』『毛詩』『尚書』『礼記』『文選』等を学ぶO
一八六九年	(明治2年) 12歳 春、石黒忠恵上京、長岡藩の儒官木村				経学を修めたO

	<p>鈍叟に漢籍を学ぶACEMO</p>		
<p>一八七一年 4・2</p>	<p>(明治4年) 14歳 東本願寺にて得度</p>		
<p>一八七二年</p>	<p>(明治5年) 15歳 歳暮、木村塾を辞すAC。翌年5月まで読書に励むC</p>	<p>襲常詩稿八五編をつくるC</p>	
<p>一八七三年 5・29</p>	<p>(明治6年) 16歳 高山楽郡社に入り洋学を学ぶACMO (ACは「5月29日」、MOは「5月」)</p>		<p>小語綴、ヨニオン氏読本、コロネル氏小地理書を主に学ぶO</p>
<p>一八七四年</p>	<p>(明治7年) 17歳 冬、春、新律綱領等を読書C</p>		<p>元明史略、老子経、国</p>

5・5	長岡洋学校に入学し洋学を学ぶACE MO		法汎論、弁妄和解、性 理略語、ローマ史を独 学O
一八七五年	(明治8年) 18歳 長岡洋学校内に和同会を結成ACO	独学の知識によって『舌耕筆耘田』 と称する手記を綴るO	
一八七六年 6月	(明治9年) 19歳 長岡洋学校の句読師となり助教を務め るACMO(Aは「一説授業生と言 う」。寄宿舎の舎監となるC 職を辞し新潟英語学校に学ぶMO(C は「明治10年6月30日、長岡洋学校の 助教を辞し浦村へ帰る」、Aは「明治10 年6月、新潟英語学校に学ぶ」)	この頃和同会雑誌に多数の論文をの せるC	

一八七七年

7月

(明治10年) 20歳

京都東本願寺の教師教校英学生となり、京都へ赴くACEMO。(ACは「7月」、EMOは月なし、また、Aは「県令籠手田安定の推薦により」)

同校で一一社を結成C

9月

東本願寺留学生として上京の命あり
A(Aは「明治11年春上京」、CEは「明治10年秋留学生として上京」)

一八七八年

4月
9月

(明治11年) 21歳

親友松本莊一郎宅へ寄宿C

東京大学予備門に入学ACEMO(A
CMOは「明治11年9月」、Eは「明治12年」)

教師教校の教官高須駕
に認められ、留学生と
なるM

一八八二年

9月

(明治14年) 24歳

東京大学文学部に入学M(Mは月なし、ACCは「9月東京大学文科大学哲学科」、Oは月なしで同じ)
学生の会「三教社」の役員をし、この頃、三宅雪嶺、棚橋一郎と大学内で知り合うC

一八八二年

(明治15年) 25歳

学友と月一回、カント、ヘーゲル、コント等の研究会を開催ACMO(Cは「哲学研究会」)

この頃、東京大学学生、石川千代松(後の生物学者)と進化論について話をする。東本願寺からの給費7円を受けるC

(Oは「この頃哲学と宗教の関係に対して関心を抱き、いわゆる「円了説」の体系化はこの時期に培われたものとみられている」)

一八八三年 5・6月	<p>(明治16年) 26歳</p> <p>大学内に文学会を組織ACCMO(Aは「5・6月」、Cは「初夏」、またMOは「今井延、林權助らと」)</p> <p>毎月集会を開催M</p>	初夏『三学論』を書くC	
一八八四年 1・26 6月 月不明	<p>(明治17年) 27歳</p> <p>文学会を二分し、神田錦町学習院にて「哲学会」を創立ACCMO(ACは「1月26日」、MOは「1月」)</p>	<p>「加藤先生ノ一大疑問ニ答ヘントス」(『東洋学芸雑誌』第33号)N</p> <p>『三学論』DEGO(Oは「東本願寺より刊行」)</p> <p>「耶穌教を破するは理論にあるか実際にあるか」を『明教新誌』に連載</p>	<p>発会式の入会者の中には、加藤弘之、西周、西村茂樹、原担山、島地黙雷、大内青巒などがいたO</p>

(後に『真理金針』となる) C

一八八五年

7・10

(明治18年) 28歳

東京大学文学部を卒業E (Eは「7月10日」、Cは「7月10日東京大学文科大学哲学科」、Dは「7月」で同じ、Mは「7月東京大学卒業」)

大学より印度哲学研究を命ぜられるACEMO

同人社及成立学舎の教員となるC

旧師石黒忠恵より官途への斡旋があったが、固辞するMO

9月

10・31

文学士の学位を受けるACEMO (ACEは「10月31日」、MOは「10月」、またACOは「論題『読荀子』で」)

学士号授与式で総代として答辞を述べるC

11・27

第1回哲学祭 (孔子、釈迦、ソクラテス、カントの四聖を祭る) を挙行ACMO (Aは「11月27日」、MOは「11

『破邪新論』CDEGJL (CDは

「9月」、EGJLは「月なし」)

印度哲学に従事したが、明治19年春より病氣にかかり療養年余に及びこれを辞すCE (Eは「印度学研究」)

月不明	月」、Cは「12月27日」)	一八八六年	1・24	(明治19年) 29歳	湯本武比古と知り合う
3月	不思議研究会を開催C	3月	1・24	不思議研究会を開催C	湯本武比古と知り合う
春	熱海で病氣療養、哲学館設立を計画C 哲学会規則改正、会長加藤弘之C	6月	6月	熱海で病氣療養、哲学館設立を計画C 哲学会規則改正、会長加藤弘之C	湯本武比古と知り合う
7月	熱海で病氣療養、哲学館設立を計画C 哲学会規則改正、会長加藤弘之C	7月	7月	熱海で病氣療養、哲学館設立を計画C 哲学会規則改正、会長加藤弘之C	湯本武比古と知り合う
『耶蘇教の難目』CDGL(Eは『耶蘇教難目』) 『仏教新論』CDGL 『哲学新論』CDGL	『真理金針』初編M(Mは「3月」、DGLは『真理金針』のみで月なし、Cも月なしで「出版開始」)	『哲学一夕話』第一編CDM(CDMは「7月」、Cは「物心論」、Dは「物心関係論」、FIGは月なしで『哲学一夕話』、Oは「7月より出版開始」) 『哲学要領』CDGJM(Dは「7月」、CMは「9月」、DGMは「上」)	『哲学要領』CDGJM(Dは「7月」、CMは「9月」、DGMは「上」)	『真理金針』初編M(Mは「3月」、DGLは『真理金針』のみで月なし、Cも月なしで「出版開始」)	湯本武比古と知り合う

10月	(秋)棚橋一郎と哲学書院の設立をはかるC	または「前編」とある。Iは月なしで『哲学要題』	
11・1	金沢藩医吉田淳一郎の娘敬子と結婚ACEO	『哲学一夕話』第2編CDM(CDは「10月」、Mは「11月」、副題はCが「本体論」、Dは「天神実体論」)『真理金針』続編(11月)KM(Kは副題「耶蘇教を排するは實際にあるか」)	(山内四郎によれば戸籍上は「敬」が正しいという)
12・18	本郷区真砂町26番地に住むAC『哲学会雑誌』の発行の企画あり委員となるACCEMO(ACEは「12月18日」、MOは「12月」、Oは『哲学雑誌』)		
一八八七年 1月	(明治20年) 30歳 哲学書院を開くACCEMO(Aは「棚橋一郎とはかり」、ACは「哲学書院飯店」、Mは「営業名義人井上円成」) 本郷弓町10に設立C	『倫理通論』CDEG(Cは「1月」、DEGは月なし、DGは「上2冊」) 『真理金針』続々編KM(Mは「1月」、Kは「2月」)	哲学館創立のため禁酒・禁煙・禁筆するC

2・2	2・5	2・6	2・9 3・15	4月	5月
『哲学会雑誌』を哲学書院より発行C EM(Cは『哲学雑誌』で「2月5日」、Kは「2月」、Eは「5月」) 国家学会設立されるACMO(ACは「2月6日」、MOは「2月」) 機関紙編集委員となるO 国家学会事務所を哲学書院に設置C 『国家学会雑誌』を発行CM(Cは「3月15日」、Mは「3月」)	『哲学会雑誌』を哲学書院より発行C EM(Cは『哲学雑誌』で「2月5日」、Kは「2月」、Eは「5月」) 国家学会設立されるACMO(ACは「2月6日」、MOは「2月」) 機関紙編集委員となるO 国家学会事務所を哲学書院に設置C 『国家学会雑誌』を発行CM(Cは「3月15日」、Mは「3月」)	『哲学会雑誌』を哲学書院より発行C EM(Cは『哲学雑誌』で「2月5日」、Kは「2月」、Eは「5月」) 国家学会設立されるACMO(ACは「2月6日」、MOは「2月」) 機関紙編集委員となるO 国家学会事務所を哲学書院に設置C 『国家学会雑誌』を発行CM(Cは「3月15日」、Mは「3月」)	『哲学会雑誌』を哲学書院より発行C EM(Cは『哲学雑誌』で「2月5日」、Kは「2月」、Eは「5月」) 国家学会設立されるACMO(ACは「2月6日」、MOは「2月」) 機関紙編集委員となるO 国家学会事務所を哲学書院に設置C 『国家学会雑誌』を発行CM(Cは「3月15日」、Mは「3月」)	『心理学講義』CDEG(Dは「4月」、DGは月なし、Eは「明治19年」) 『哲学一夕話』CD(Cは「4月」で「第3編真理論」、Dは月なし「真理性質論」) 『哲学要領』後編DG(Dは「4月」、Gは月なし) 『妖怪玄談』DG(Dは「5月」、Gは月なし、Cは「5月『妖怪玄論』」)	政教社をつくり機関紙『日本人』の発行にあたるACMO(MOは「杉浦重剛、三宅雄二郎らと」、Cは『日本人』論)
『仏教活論序論』CDEFGKM(Cは「2月2日」、DKMは「2月」、Fは月なし『仏教活論』、Eは「明治21年刊行」とし、「明治20年『顕正活論』刊行」)	『仏教活論序論』CDEFGKM(Cは「2月2日」、DKMは「2月」、Fは月なし『仏教活論』、Eは「明治21年刊行」とし、「明治20年『顕正活論』刊行」)	『仏教活論序論』CDEFGKM(Cは「2月2日」、DKMは「2月」、Fは月なし『仏教活論』、Eは「明治21年刊行」とし、「明治20年『顕正活論』刊行」)	『仏教活論序論』CDEFGKM(Cは「2月2日」、DKMは「2月」、Fは月なし『仏教活論』、Eは「明治21年刊行」とし、「明治20年『顕正活論』刊行」)	『心理学講義』CDEG(Dは「4月」、DGは月なし、Eは「明治19年」) 『哲学一夕話』CD(Cは「4月」で「第3編真理論」、Dは月なし「真理性質論」) 『哲学要領』後編DG(Dは「4月」、Gは月なし) 『妖怪玄談』DG(Dは「5月」、Gは月なし、Cは「5月『妖怪玄論』」)	政教社をつくり機関紙『日本人』の発行にあたるACMO(MOは「杉浦重剛、三宅雄二郎らと」、Cは『日本人』論)

『勅語略解』D 『純正哲学』D	<div data-bbox="654 154 686 269">一八八八年</div> <div data-bbox="654 315 686 508">(明治21年) 31歳</div> <div data-bbox="622 215 649 292">1・8</div> <div data-bbox="510 215 542 292">3・29</div> <div data-bbox="409 215 436 292">4・3</div> <div data-bbox="335 215 361 269">6月</div> <div data-bbox="266 215 292 292">6・9</div> <div data-bbox="117 315 292 716"> <p>欧米漫遊のため横浜より出発A B C E MO (Cは「6月9日」、A E M Oは 「5月」、目的はM Oが「視察旅行」、 A Eは「東洋学の状況を視察」 棚橋一郎に館主代理を委嘱B O</p> </div>
『哲学館講義録』A M O (Aは「1 月8」、M Oは月なし、Cは「1月18 日『哲学館第1回講義録』を発行」 『宗教新論』C D E G M L O (Cは 「3月29日」、D Mは「3月」、E G L Oは月なし) 「日本宗教論」を『日本人』第1号 に掲載 「加藤弘之氏の位置」(『国民之友』 二―二四) N	

6・24	サンフランシスコ着	7月
一八八九年	(明治22年) 32歳	6月
8・1	MO 東洋大学科(国学漢学仏教学)開設趣旨を發表、有志の寄付を募るB 哲学館、本郷区駒込蓬萊町28番地に移転BC (Bは「8月1日」、Cは「8月」) 郷里の父より帰郷の要望に対し、仏教が危機存亡の重大事局につき帰郷不能の手紙を出すC	8・28
9月	(初旬)大内青巒と仏教公認運動を起す A C M O (Cは「9月初旬」、A M O	『日本政教論』D E G I J K L M O (D M Oは「9月」、E G I J K L
	「加藤弘之氏『天地万物皆帰吾有』論の大意文部大臣博士号授与式の演説及び博士学位人名」(『日本大家論集』第14編) N	

11・13	11・9	11・7	11・1	10・30	10・3	9・27	9・20	9・10	9・4
哲学館移転式B C	勝海舟「井上円了、金子15円寄附」と日記H	勝海舟「円了方へ一封を認め遣わす」と日記H	哲学館授業再開、客宿舍開設B C	哲学館校舎竣工B C（Bは「10月30日」、Cは「10月31日」）	勝海舟「井上円了、哲学院〔館〕へ百円寄附」と日記H	勝海舟「井上円了」と日記H	校舎を再起工C	棟倒壊B C（Bは「9月10日」、Cは「9月11日」）	京都各宗本山を歴訪A C 勝海舟「井上円了」と日記H （中旬）東京の寺院を遊説C 暴風雨のため新築中の哲学館、校舎全 校倒壊B C

は月なし、Cは「9月『日本政教論
附教育余論』」

一八九〇年

(明治23年) 33歳

1月

哲学館規則改正C

2月

4・13

哲学館日曜講義を開催BC
妖怪研究会を設置C

6月

7・6

哲学館内に哲学研究会を結成BC(Bは「会長加藤弘之、副会長井上田了、機関誌『天則』」)

7・14

哲学館第1回修業証書授与式BC

7・17

雑誌『天則』第3巻1号発行C

8月

9月

哲学館に専門設置のための寄附金規則をつくるC

9・13

尋常中学郁文館設立され、顧問となるAC(Aは「9月13日」、Cは「9月」)

勝海舟「井上田了」と日記H

9・28

『仏教活論第3編頭正活論』C(M

名刺に禁酒禁煙諸事節約の文字を印刷C

『哲学飛将棋指南』CDG(CDは「1月」、Gは月なし)

『哲学飛将棋』DG(Dは「1月」、Gは月なし)

『星界想遊記』CDE(CDは「2月」、Eは月なし「一名哲学小説」)

『日曜講話・哲学講演集』C(Cは「6月」Eは月なし『哲学講演集』)

『欧米各国政教日記』上DG(Dは「8月」、Gは月なし)

10・16 11・2	勝海舟「哲学館寄附の事」と日記H 哲学館専門科設立の基金募集のため、 静岡、愛知、岐阜、滋賀、三重を巡講 AC。12月15日帰京C（出発をCは 「11月2日」、Aは「12月2日」） 勝海舟「井上四了」と日記H	12・20
1・31	（明治24年）34歳 静岡、滋賀、和歌山、四国を巡講AC （Cは「1月31日」、Aは「2月1日」）。 4月1日帰京C 勝海舟「井上四了」と日記H 京都、鳥取、島根を巡講AC（Aは 「5月10日」、Cは「5月11日」）。6月	5・10 4・28
10・13 教育勅語発布		『倫理摘要』CE（Cは「5月」、 Eは月なし、DGは「明治25年」） 『欧米各国政教日記』DG（Dは 「12月」、Gは月なし） Kは9月『顕正活論』 Dは9月『仏教活論顕正活論』、E は月なし『仏教活論本論（顕正活 論）』、IJは月なし『仏教活論』

<p>19日帰京C 7・4 勝海舟「井上田了」と日記H 11月</p>	<p>12・19 哲学館専門科設置資金募集報告書を作 成C</p>	<p>月不明 この年、迷信打破のため、妖怪研究会 を設立ACCEM</p>	<p>『哲学一朝話』CDFIM（CDは 「11月」、FIMは月なし） 『教育応用字合加留多指南』C（C は「12月」、Dは12月『教育適用字 合かるた』、Eは月なし『教育応用 字合歌留多指南』、Gは月なし『教育 適用字合加留多』） 『妖怪学講義録』CD（MOは「同 書執筆」） 『理論的宗教学』CDEM 『哲学要領』E</p>
<p>一八九二年 1・19 勝海舟「井上田了」と日記H 1・21 兵庫、岡山、広島、山口を巡講AC。 3月6日帰京C 4・11 勝海舟を訪問、たまたま西郷隆盛との</p>	<p>（明治25年）35歳</p>		

4・20	新潟県の巡講に出発C 哲学会評議員となるACMO	5月	6・23	勝海舟「井上田了」と日記H 兵庫、岡山、広島、山口を巡講AC。	7・17	9月6日帰京C 哲学館に和漢科、仏書科、会読部を設置C	9・16	山口県を巡講AC（Aは「11月」、Cは「12月21日」。明治26年2月8日までC	12・21	月不明
会見25年目の日につき数首の漢詩をも らうC		『宗教哲学』C D F I（Cは「5月」、D F Iは月なし） 『真宗哲学序論』C E M（Dは、5月『真宗哲学』、Gは月なし同名、C E Mは月なし） 『日本教育学』C D E 『教育総論』C D E 『仏教哲学』C D 『古代哲学』E D（Cは『古代及近世哲学史緒論』） 『日本倫理学』C D I 『心理論』C D 『心理実験』C								

『純正哲学』F		一八九三年
(明治26年) 36歳		1月
山口県、九州地方を巡講AC		2月
群馬、新潟を巡講AC (Cは「4月5日、9日間」、Aは「5月」)		4・5
6日20日まで新潟県を巡講C		5月
福島、北海道を巡講AC (Cは「7月19日」、Aは「7月」)。9月4日までC		7・19
緝熙館を設立B		8月
哲学館で哲学祭を挙行C		9・16
『日本倫理学案』CDEGIM (C DMは「1月」、EGIは月なし)		11・5
『教育宗教関係論』CDEGKL (C Dは「4月」、EGKLは月なし、MOは4月『日本教育宗教関係論』)		
『禅宗哲学序論』CLM (CMは「5月」、Lは月なし、Dは5月『禅宗哲学』、Gは月なし『禅宗哲学』Eは「明治28年刊行」)		
『忠孝活論』CELMO (CD MOは「7月」、ELは月なし)		
『妖怪学講義緒言』CDGC (は「8月」、Dは「9月」、Gは月なし)		
『妖怪学講義録』第1号CFM (C は「11月5日」、Mは「11月」、Iは		

月不明	一八九四年	2月	3・2	8月
<p>月なし、Cは最終刊行年月日を「明治27年1月25日」、Mは「明治27年11月」。(妖怪学関係では他にGに『妖怪学全書』『講義録妖怪学講義』がある)</p> <p>『再航詩集』E</p> <p>『仏門忠孝論一班』CE</p>				
<p>『記憶術』DE(Dは「2月」、Eは月なし、Cは2月『記憶術講義』)</p>				
<p>湯本武比古、哲学館講師となるC</p>				
<p>『日本仏教哲学系統論』ACMO(A Cは「鎌倉成就院にて」、Oは</p>				
<p>書は『仏教哲学系統論』(山内四郎によれば同</p>				
<p>雑誌『東洋哲学』を創刊A B C M O(Cは「3月2日」、M Oは「3月」、Aは月なし、Cは哲学研究会を「東洋哲学会と改称し、主策となる」、Bは「3月2日」)</p> <p>「東洋哲学」の語をはじめて用いたO</p>				
<p>(明治27年) 37歳</p>				

7・23	日清戦争勝利の報を祝し10年間の禁酒をとくC	「鎌倉成塾院にて」、またCは「学位請求論文として」
10・30	父円悟逝去ACCO（Cは「10月30日」、Aは「10月」、Oは月なし）	『戦争哲学一斑』CDEI（CDは「10月」、EIは月なし）
11・1	中学講習会を設置C	『哲学一夕話』（合本）D
12月	この年、哲学館、文部省に教員免許認定の特典を再提出C	『自宅独習中学講義録』EM（Mは「11月」、Eは月なし） 『戦争哲学将棋指南』CE（Cは「12月」、Eは月なし、Dは『戦争哲学将棋』）
一八九五年 3月	(明治28年) 38歳	『日宗哲学序論』CLMO（CMOは「3月」、Lは月なし、Dは3月『日宗哲学』、Gは「明治27年」）

<p>一八九六年</p> <p>1月</p> <p>3・4</p> <p>6・8</p>		<p>8月</p> <p>9月</p> <p>11月</p>
<p>(明治29年) 39歳</p> <p>哲学館に図書館建設の旨趣を発表C</p> <p>長野県を巡講AC(Aは「3月4日」、Cは「3月24日」)。5月10日帰京C</p> <p>論題「日本仏教哲学系統論」によりAMO、文学博士の学位を受けるACE</p> <p>MO(ACEは「6月8日」、MOは</p>		<p>哲学館入試制度となるC</p> <p>学制を改め本科予科制(緝熙館を移したるもの)教育学部、宗教学部の2学部を設置、教育家宗教家の養成B</p> <p>小石川原町に三、八五〇坪の土地を一〇、〇〇〇円で購入。駒込富士前町13の畑地二反一畝五歩を一、二七〇円で購入C(Bは「小石川区原町鶏声ヶ窪に校地購入」)</p>
		<p>『失念術講義』C(Dは8月『失念術——名忘憂忘苦忘病の新法』)</p>
<p>学位については、山内四郎「井上田了の学位に就いて」(『井上田了</p>		

12月	「6月」 哲学館、漢学専修科設置の旨趣書を発 表C	12・13	郁文館より失火、哲学館に類焼の上全 焼C	月不明	本郷区竜岡町36番地に移転B この年、哲学館、小松宮彰仁親王殿下 から「護国愛理」の扁額を受けるBC
一八九七年	1月	(明治30年) 40歳	哲学館、本郷区竜岡町麟祥院前の内観 工場に校舎を仮設、授業開始C 哲学館、漢学専修科開講BC 高島米峰等、井上円了から雑誌『東洋	『妖怪学講義』(合本)E 『倫理学講義』DE(Cは『倫理学』) 『東洋心理学』CE(Dは明治27年 『東洋心理学』) 『仏教哲学系統論』F(Iは『仏教 系統論』)	
2月	1・8				

2・19	哲学』を継承C
2・22	宮内大臣より『妖怪講義録』を天皇に献上の命をうけ、感激して奉献するC (Aは「3月22日『妖怪学講義録』を」 安藤弘を郷里より上京させるC 哲学館、小石川区原町に新校舎建築の工事着工BC 哲学館、仏教専修科の開講式を举行BC 新潟県佐渡へ巡講C (初旬)哲学館、原町に新校舎竣工、工費三、〇〇〇円余C 原町に住居を移転C 哲学館も移転ABCO 哲学館、宮内省より恩賜金三〇〇円を受ける。この日が大変喜び、安藤弘、磯江潤と祝宴を開催BC 哲学館、原町校舎で始業式を举行C 哲学館、20日間にわたり文相、府知事
4・8	
4月	
3月	
夏	
7月	
7・17	
8・25	
9・16	
10・2	

『外道哲学』CDEKMO(Cは「2月19日」、DMOは「2月」、Eは月なし。MOは「学位論文の一部」、Lは「別名、仏教哲学系統論第1編」)

『教育家宗教家内地雑居準備心得』

<p>一八九八年 2月</p>	<p>(明治31年) 41歳 私立京北尋常中学校創立主意書を発表</p>	<p>『妖怪百談』 CDE (CDは「2</p>
<p>11月 月不明</p>	<p>を招き、新築落成式開校式を挙行C</p>	<p>D (Cは10月『教育家宗教家の内地 雑居に対する準備心得』、Eは月な し『内地雑居準備心得』 『妖怪研究の結果』CDE (CDは 「11月」、Eは月なし、Dは「一名 妖怪早わかり」) 『勅語略解』CE 『宗教制度及比較宗教学』CEMO (Dは「明治28年」) 『仏教理科』DE (Cは『仏教理科 講義』 『仏教心理講義』C (Dは『仏教心 理学』 『哲学史総論』(Cは「明治30年」、 Dは「明治28年」、Iは明治28年『哲 学史』)</p>

11月	10・27	10・18	夏	7月	6月	4・8	4月	2・20
哲学館で孔子誕生会を開催BC				湯本武比古、杉谷佐五郎、三島定之助、田中治六、安藤弘を自宅に招き、京北中学校創立の協議を行うC 私立京北中学校設立を認可されるBC 校舎の新築に着手C（Aは設立認可を「明治30年10月30日」）		哲学館、釈尊降誕会を開催BC	学制を改め教育学部、哲学部の2学部とするB	BC（Bは「恩賜金記念」） 哲学館内で宗教会第1回例会を開催BC
『僧弊改良論』CDE（CDは「11				度哲学要綱」 『印度哲学綱要』EDKM（DMは「7月」、EKは月なし、Cは夏）	月」、Eは月なし） 『破唯物論』CDEIMO（CDMOは「2月」、EIは月なし、Dは「一名俗論退治」） 『教育的世界観及人生観』CMO（MOは「6月」、Cは「夏」、Mは「一名教育家安心論」、Dは月なし） 『教育家安心論』、Eは月なしで『教育的世界観及人生観』と『教育家安心論』 『印度哲学綱要』EDKM（DMは「7月」、EKは月なし、Cは夏）			

12月	月不明	一八九九年	2・11	2・16	4・1	5・7	5・13	7月	7・10
月、Eは月なし)		(明治32年) 42歳		京北中学校監督舎開設B C (Cは「2月11日」、Bは「2月16日」) 京北中学校開校式B C M (Cは「2月16日」、Bは「2月26日」、Mは「2月」) 京北中学校校長となるA B C 京北中学校授業開始B 京北中学校父兄会を開催C 下総宗吾神社、印旛沼、成田不動をまわるC 長野県を巡講A C 哲学館教員免許無試験の指令を受ける		『中等倫理書』C E (Cは「12月」、Eは月なし、Dは12月『中等倫理書』5冊) 『大乘哲学』C D 『鬼門論』K		『哲学早わかり』D E M (D Mは「2月」、Eは月なし、Cは2月『通俗講話言文一致哲学早わかり』) 『靈魂不滅論』C D I M (C M Dは「4月」、Iは月なし)	

7・20 9月	B C	新潟県を巡講A C。9月2日帰京C 学制を変更し、教育学部を倫理科と漢文科の2科に分けて哲学部と並行させ、又漢学専修科を教育学部に仏教専修科を哲学部に合併B
11月	C	哲学館、講堂及び図書館建築に着手B
11・7		伊豆地方を巡講A C (Cは「11月7日」、Aは「11月」)。12月9日帰京C
一九〇〇年	(明治33年) 43歳	哲学館、紀元節式典を挙行B 哲学館、講堂及び図書館の落成式C
3・4		新潟、石川、奈良の諸県を巡講A (Cは「4月新潟、能登、長野、奈良を巡講」)
4月		『妖怪学雑誌』創刊C
『西洋賢哲像伝』(2月) C		『妖怪学雑誌』第1号M E (Mは「4月」、Kは月なし、Eは「明治34年3月第48号で完結」) 『続妖怪百談』C D E (C Dは「4月」、Eは月なし)

1901年							
2・18	11・17	9・17	7・18	5・10	4・10	4・2	4・1
三重、志摩、伊勢、紀伊地方を巡講。	秋 長野県を巡講C 和歌山、奈良を巡講。12月31日帰京C	C 始業式。学制を改革し、予科と本科に分け、本科教育部を第1科第2科、哲学部を第1科第2科に分けるB	能登地方の巡講に出発。9月2日帰京	哲学館、講堂落成並に図書館開館式を挙行B	文部省より修身教科書調査委員を委嘱されるACEO		
『円了随筆』CDEO (CDOは					『妖怪談』C	『漢学普通科講義録』C 『通俗哲学講義録』C	『女子修身書』CD (Dは「5冊」)

4・5	3月20日帰京C（Aは2月「三重、和歌山、富山の諸県を巡講」）	『2月』、Eは月なし） 『二宗哲学大意』CE（Cは「2月」、Eは月なし）
5月	新潟県へ巡講AC。5月12日帰京A（Cは「5月15日」）	『紀州南部各地巡回報告』C
6・8	京北中学校第1回卒業式へ出席ABC（Bは「3月25日」、Cは「6月8日」、Aは「7月8日」）	
6・23	富山県を巡講AC。7月12日帰京C（Aは「7月10日まで」）	
7・14	富山県を巡講A	
8・1	哲学館第1回夏期講習会開催BC。8月15日までC	
8・15	富山県を巡講AC	
10・20	内閣より高等教育会議議員を嘱託されるACE（Aは「10月20日」、CEは「10月25日」）	『靈魂破滅論』E 『字合かるた』E
月不明		

一九〇二年

1月

(明治35年) 45歳

2・17

4月

4・1

5月

6・21

7・12

7・13

7・17

8・1

播磨地方を巡講。3月27日帰京C

加賀地方を巡講C

哲学館大学部開設を予告C

C 福井県巡講に出発AC。7月14日まで

哲学館卒業生送別会に安藤弘とともに招待されるC

返礼に卒業生を自宅に招き茶菓の接待するC

福井県を巡講AC

哲学館第2回夏期講習会開講。大学予

『哲学うらなひ』CD(Dは「明治35年1月」、Cは「明治34年」)

『修身要鑑』CE(Cは「1月」、Eは月なし)

『田了茶話』CDE(Cは「1月」、Dは「2月」、Eは月なし)

『修身教科書』CE(Cは「1月」、Eは月なし)

『甫水論集』CE(Cは「4月」、Eは月なし)

『宗教改革案』CDEIO(COは「5月」、DEIは月なし)

『球算改良案』CE(Cは「5月」、Eは月なし)

2・11	一九〇三年	12・14	12・13	11・15	11・8	11・7	10・25	10月
		カルカッタ到着C	文部省、哲学館の中等教員無試験検定の特典を剥奪する（哲学館事件）BC	命により謹慎の意を表わすC 文部省、哲学館に対し倫理学の授業内容の紹介を行い、生徒の試験答案の差出しを命ずる。哲学館職員一同円了の命により謹慎の意を表わすC	外遊に出発ACCEMO（ACは「11月15日」、EMOは「11月」） 文部省、哲学館に対し倫理学の授業内容の紹介を行い、生徒の試験答案の差出しを命ずる。哲学館職員一同円了の命により謹慎の意を表わすC	欧米および印度の教育事情視察のため 植物園で洋行送別会C	哲学館卒業試験に文部省視学官の監査を受けるC 哲学館教育学部甲種生第1回卒業式C	定地として和田山を購入B 播磨、加賀、越後地方を巡講AC 哲学館卒業試験に文部省視学官の監査を受けるC

（明治36年） 46歳
ロンドンより哲学館事件に関する回答

4・20	を送るC 哲学館、円了の命により文部省へ歎願書を提出C
7・27	帰朝ACEMO（ACは「7月27日」、MOは「7月」、Eは「8月」）
8・16	帰朝歓迎会を行うABC（ACは「8月16日」、Bは「10月16日」）
8・27	哲学館、校名を哲学館大学と改称C
9月	修身教会設立主意書を全国に頒布AC 「広く同窓諸子に告ぐ」を発表C
10月	江古田村和田山に哲学堂を建立し、四聖を祭るACMO
10・1	私立哲学館大学の設置を認可されるB
11・15	遺言予告を『円了漫録』の巻頭に発表C
12月	

『再航詩集』C	
『円了漫録』C（Eは月なしで『円了漫話』）	
『天狗論』CE（Cは「12月」、Eは月なし）	

（以下、大学名より「私立」を省略）

一九〇四年

1月

(明治37年) 47歳
遺言状の公開を雑誌『東洋哲学』に掲載

1・15

2・11

山梨を巡講C(Aは「山梨、群馬」)
修身教会を結成CEM

2・12

3・14

『修身教会雑誌』第1号を発行CM
「修身教会の旨趣」を発表E
京北幼稚園を創立し自ら園長となるA
(Eは「明治38年3月14日設立」)

4月

4・1

哲学館大学開校M
哲学館大学開校式を挙行B。哲学館大学長に就任AB。大学部を開設、1科(哲学宗教諸科)2科(国語漢文専攻)に分け、専門部を第1科第2科に分け、1科(倫理および教育諸科)2科(国語および漢文諸科)B

4・8

哲学堂落成式を挙行ABCM(ACMは「4月1日」、Bは「4月8日」)
哲学堂内の四聖堂の開堂式を挙行C
大学顧問及び評議員設置BC(Bは「4月8日」、Cは「4月」)

6・10

7月

「創設修身教会宗旨」を発表C

『仏教通観』CE(Cは「6月10日」、Eは月なし)

「哲学堂由来記」(『東洋哲学』7月)

夏	神経的疲労を覚え始める。学校を解散し、講習会組織に改めることを考える	号) C
7・8月	群馬、茨城を巡講 C	『迷信解』 C E (Cは「9月」、Eは月なし)
9月		『中等修身書』 1~5 C (Eは月なしで『中等修身書』)
9・21		『心理療法』 C E (Cは「11月」、Eは月なし)
11月		『改良新案の夢』 E
月不明	この年、哲学館に改革運動起る C	『四了講話集』 E
一九〇五年	(明治38年) 48歳	
1・12	再び高等教育会議議員に任命される A	
2・22	C E	
3・14	東京府知事に幼稚園設立を出願 C 私立京北幼稚園設立を認可 B C	

(以下、幼稚園名より

5月	神經疲労再発、退隱の意志を起す。その後快方に向うC	『仏教大意』C	「私立」を省略)
5・3	京北幼稚園の開園式を挙行BC		
7・24	静岡、山口、長崎、茨城の諸県を巡講AC。9月4日帰京C		
9月	哲学館大学、京北中学校からの退隱を思い立つ。小学校設立を考えるC		
9・25		『中等女子修身訓』1/5C (Eは月なしで『中等女子修身訓』)	
12月	(初旬)2度も庭前で卒倒しそうになるC		
12・13	哲学館大学記念会を上野精養軒で行い、夜退隱を決意C		
12・15	前田慧雲、湯本武比古への学校譲渡の契約を完了C		
12・31	中島徳藏に哲学館譲渡の事を告げるC		
一九〇六年 1月	(明治39年) 49歳 哲学館大学長、京北中学校長を辞し、名誉学長・校長となるACCEMO		1月退隱し両校を財団法人にするC

10・17	7・8	7・4	6・13	6・6	4・2	2・11	2・5	1・8
駒込曙町3番地に移転C								
「哲学館、京北の職を辞す旨」を発表。哲学館に退隠。修身教会拡張に従事。学生を講堂に集め退隠の理由を説明BC。哲学館大学経営の組織を改正B								
退隠の理由を『東洋哲学』第13巻2号に発表ABC								
退隠の理由を『修身教会雑誌』に発表AC								
神奈川県、京都府、大和地方を巡講AC。5月23日帰京C								
哲学館大学を「私立東洋大学」と改称BCE(Eは「1月辞職とともに改称」、Bは「6月28日」)								
足尾、長岡市を巡講AC								
財団法人組織とし、私立東洋大学財団と改称BC								
香川、長崎の2県を巡講し、ついで満州、韓国を巡講AC。11月29日帰京C								
東洋大学において壽像除幕式挙行(巡講中)BC								

1月15日湯本武比古、私立京北中学校長に就任B

2月2日、前田慧雲第2代学長に就任B

(以下、大学名より「私立」を省略)

6月20日、郷里にて亡父13回忌の法要を行い、6月26日帰京C

7月6日、財団理事前田慧雲、安藤弘、監事湯本武比古C

一九〇七年 1・27	(明治40年) 50歳 沖繩、鹿児島、宮崎、大分の巡講に出 発A C。5月24日帰京C (Aは「6月 26日帰京」) 京北幼稚園長を辞すA B C。後任湯本 武比古B C	3月	5・13	東洋大学、文部省より教員免許無試験 検定を認可されるB C (Bは「5月13 日」、Cは「5月31日」)	6月	7・16 7・21	駒込富士前町35番地に移転A C 北海道の巡講に出発A C。11月28日帰 京A C	9月	岡田三郎助筆の肖像画完成A C。1面 は東洋大学講堂、他は哲学堂C
『日本周遊奇談』C E (Cは「6 月」、Eは月なし)									
この年、弟藤井田順逝 去C 5月10日京比中学、財 団法人となり、理事湯 本武比古、杉谷佐五 郎、田中治大などC									

<p>一九〇八年</p> <p>1・29</p> <p>(明治41年) 51歳</p> <p>兵庫、福岡、大分、熊本、佐賀の諸県を巡講。8月2日帰京AC</p> <p>京北実業学校を設立B</p>	<p>2・26</p> <p>8・12</p> <p>10月</p> <p>福岡県の巡講に出発AC(Aは「京都府より」)。11月4日帰京AC</p>		<p>一九〇九年</p> <p>1・10</p> <p>1・25</p> <p>1・29</p> <p>(明治42年) 52歳</p> <p>兵庫、愛媛を巡講AC。3月20日帰京C(Aは「3月29日帰京」)</p>
	<p>『純正哲学』CEMO(CMOは「2月」、Eは月なし、Mは『帝国百科全書』の中に」、MOは「上下2巻」、Oは「博文館より」)</p>	<p>『自家格言集』CEO(Oは「明治41年10月妖怪研究会より刊行」、Cは「明治42年10月」、Eは「明治42年」)</p>	<p>『南船北馬集』2号C</p> <p>『南船北馬集』3号C</p>

4・6	有馬温泉を経て、愛媛、島根を巡講。 8月1日帰京AC
5月	東洋大学哲学会を結成B
8・19	清水へ行くC
8・25	清水滞在中の円了へ、母病重しとの電 報くるC
8・27	母いく逝去AC
9月	
9月	(上旬)母の法要も終り帰京。喪中につ き哲学堂にこもるC
10月	範根にて静養AC
11月	哲学堂に六賢台、三学亭、山門を増築 完成ACMO
11・11	伊豆大島を巡講。11月25日帰京AC
12・24	埼玉県熊谷にて講演C
月不明	
『忠孝活論』	
『哲学新案』CEM(Cは「9月」、 Mは「12月」、Eは月なし。Iは『新 学新案』)	

一九一〇年

(明治43年) 53歳

『南船北馬集』 4号C

12 ・ 20	11 ・ 21	11 ・ 6	10 ・ 22	8 ・ 26	6 ・ 30	6 月	6 ・ 2	3 ・ 20	2 ・ 12	2 ・ 10	1 ・ 30
<p>神奈川県厚木で講演C 千葉県を巡講。3月14日帰京AC 愛媛、三重、大阪、岡山、鳥取を巡講 AC(Aは愛知が「愛媛」)。5月26日 帰京AC 八丈島および小笠原に渡航の予定が、 長女の病気のため延期C (上旬)四万、草津、赤倉にて静養し郷 里へ向う。6月16日帰郷。20日まで両 親の法要を行うC 長野、岐阜を巡講。8月22日帰京AC 美濃東部地方を巡講AC。途中清水で 海水浴を行うC。10月17日帰京AC 福島県を巡講AC(Cは「10月22日」、 Aは「10月23日」)。10月31日帰京AC 夫人とともに関西漫遊AC(Cは「11 月6日」、Aは「11月」)。11月16日帰 京C 八丈島、小笠原を巡講。12月5日帰京 AC</p>											

『南船北馬集』 5号C

<p>一九一一年</p> <p>1・7</p> <p>2月</p>	<p>(明治44年) 54歳</p> <p>台湾を巡講。2月27日帰国AC</p>		
<p>4・1</p> <p>5月</p>	<p>濠州、南阿、南米、北米、南洋諸島の視察に出発ACCEMO(ACは「4月1日」、EMOは「4月」)</p> <p>雑誌『修身』廃刊C</p>	<p>「妖怪学上より見たる家庭」(『婦女界』2月号)</p>	
<p>一九一二年</p> <p>1・22</p> <p>2・3</p> <p>2・20</p>	<p>(明治45年・大正元年) 55歳</p> <p>帰朝ACCEMO(ACは「1月22日」、EMOは「1月」)</p> <p>帰朝歓迎会を行うCE</p> <p>熱海で静養。3月10日帰京C</p>		

3月 (下旬)箱根にて静養C

4月

4・25

夫人とともに本能寺、高野山に参詣A

C。5月6日帰京C

箱根にて『活仏教』を執筆、静養。7

月16日帰京C

明治天皇逝去、以後哲学堂にこもり謹

悼敬弔を表すC

修身教会を「国民道德普及会」と改称

A C

8月

9・5

明治天皇の大葬につき二重橋へ行くC

9・13

埼玉県を巡講。10月22日帰京A C

兵庫県を巡講。11月19日帰京A C

福島県を巡講。12月14日帰京A C

淡路島を巡講。12月29日帰京A C

12・15

11・22

10・31

9・27

『南半球五万哩』(Cは「3月」、Eは月なし)

『明治徒然草』(Cは「4月」、Eは月なし)

『南船北馬集』6号C

『活仏教』C M O (Cは「9月5日」、M Oは「9月、仏教活論の未刊行部分を」)

『日本仏教』C E (Cは「9月15日」、Eは月なし)

『人生是れ戦場』C (Cは「12月」、Eは大正3年『人生是戦場』)

12 ・ 31	一九一三年	6 ・ 24	6 ・ 18	6 ・ 15	5 ・ 20	3 ・ 31	3 ・ 30	2 ・ 14	1 ・ 29	1 ・ 4	1 ・ 1		
哲学堂会計報告書を作成、不足四四三 円八七銭C	(大正2年) 56歳	自宅にて諒闇中の新年を迎えるC 埼玉県を巡講。1月27日帰京AC 持病の治療のため修善寺温泉へ行くC 徳島、兵庫、広島 of 諸県を巡講。3月 26日帰京AC 東洋大学卒業式に出席C 京北中学校卒業式に出席AC (Aは 「3月30日」、Cは「3月31日」) 広島県の巡講に出発AC。4月18日帰 京A (Cは「5月18日帰京」) 石川、福井、富山の諸県を巡講A (Cは 「加賀、能登、越後」)。5月29日帰京C 塩原温泉へ行き、6月21日帰京C 静岡、広島、山口の諸県を巡講。9月											

『南船北馬集』7号C

1月13日、私立京北財
団を私立東洋大学財団
に合併BC (Cは「1
月13日」、Bは「4月1
日」)

6 ・ 28	9 ・ 9	10 ・ 31	11 ・ 16	12 ・ 3	12 ・ 18	12 ・ 31	3日帰京AC	山口県を巡講AC	巡講より帰京AC	東洋大学、合併校舎新築落成式に出席 C	山口県を巡講。12月30日帰京AC	哲学堂の講堂落成ACMO（ACは 「12月3日」、MOは「12月」）	哲学堂会計報告書を作成、四、六九二 円五五銭余。これを哲学堂図書館建設 費にあてる予定C	1 ・ 3	一九二四年	（大正3年） 57歳	湯河原温泉での静養に出発。 1月17日 帰京
													『哲界一瞥』C（Cは「6月28日」、 Eは月なしで『哲学一瞥』）	『大正業根譚』C	『大正三字経』（1月）C	『春闘文』（1月）C	

一九一五年								
6・20	5月末	5・27	3・31	3・30	2・15	2・4	1・14	12・9
熱海に遊ぶA B 岡山県を巡講。3月27日帰京A C 東洋大学卒業式に出席A C。講演し、 病氣の大内青巒学長に代って証書授与 C 京北中学校卒業式で講演。岡山県を巡 講。5月24日帰京A C 三浦半島を巡遊A C。6月3日帰京C 恩師加藤弘之80歳の記念祝賀会に出席 A C						12・30	12月	12・9
『南船北馬集』10号C 合本『円了隨筆』(3月)MO(M は「金港堂より」) 『軍人勅諭五十韻』C						福島県を巡講。12月28日帰京A C (中旬)哲学堂図書館の建設に着手A C MO(Aは「12月中旬」、CMOは「12 月」) 修善寺温泉にて越年A C		

1916年	6・21	秋田県を巡講。8月28日帰京AC		
9・29	信越地方を巡講AC。9月30日巡講中郷里に一泊するC。10月14日帰京AC			
10・23	哲学堂図書館落成披露会を開催AC (Cは「10月23日」、Aは「10月24日」)			
10・27	箱根に遊ぶAC			
12・1	栃木県を巡講。12月21日帰京AC			
12・18	弟円成、危篤のため帰郷AC			
12・22	哲学堂会計報告、三、七三二円五四銭			
12・31	余C			
1・4	(大正5年) 59歳			
1・7	京北中学校新年拝賀式に出席AC。湯本武比古が旅行中につき勅語代読C			
2月	東洋大学新年会に出席C 鎌倉に遊ぶC この頃、政府からの表彰の議あるが固			
	『妖怪叢書』(1月) C			
	『哲学堂独案内』CE (Cは「12月」、Eは月なし)			
	『南船北馬集』11号C			
	固辞のときに漢詩「生			

9・9	7・28	7・23	7・16	6・29	6・23	6・19	6月	6・4	5・14	4・1	3・30	2・11	2・1																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																								
旅の疲れを治すため鶴沼にて静養。9	山形県を巡講C(Aは「新潟県も」)。 9月8日帰京AC	逗子養神亭に遊ぶC	哲学堂で夏期講習会を開催、「活仏教」を講演AC。7月22日までC	山形県を巡講。7月13日帰京AC(Cは「郷里より」)	山形県を巡講。7月13日帰京AC(Cは「郷里より」)	法要のため帰郷C	(中旬)4、5日間、熱海にて静養C	哲学堂図書館の日曜公開を開始AC	哲学堂で日曜講演を開催AC	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業式に出席A(Cは3月31日)	三重、岐阜の2県を巡講。5月12日帰京AC	京AC	東洋大学卒業式に出席AC	京北中学校卒業

『迷信と宗教』CE(Cは「3月」、Eは月なし)

『哲学茶話』(5月)C(Eは月なし『哲窓茶話』)

『南船北馬集』12号C

遭昭代五栄大何望勲章
飾老休」C

東洋大学、女子の入学
を許可B

9・30	月12日帰京C	中国山東省の巡講に出発AC。泰山、曲阜に詣でるA。10月20日帰国AC
11・7	丹後、若狭、丹波地方を巡講。12月18日帰京AC	
12・15	湯河原温泉にて越年AC	
12月末	哲学堂会計報告、六、七八二円九二銭余C	
一九一七年		(大正6年) 60歳
1・4	土肥、吉沢村の青年会で「迷信について」を講演C	『大正徒然草』CE (Cは「1月」、Eは月なし)
1・22	鶴沼に遊ぶ。2月6日帰京C	
2・15	三河、大阪の巡講に出発。3月29日帰京AC	
3・30	東洋大学卒業式に出席C	
4・1	丹波、山城の巡講に出発。4月6日帰京AC	
4・7	長男玄一結婚AC	

4 ・ 8	京都、大阪の巡講に出発A C。5月2日帰京A (Cは「4月15日帰京。4月21日、伊賀上野の巡講。5月2日帰京」)
5 ・ 21	箱根塔沢温泉にて静養。5月31日帰京C
6 ・ 30	宮城、岩手の2県を巡講。8月15日帰京A C
8 ・ 18	新潟、岩手の2県を巡講。9月21日帰京A C (ただしCは「8月25日一旦帰京、8月28日再び巡講へ」)
9 ・ 26	群馬県を巡講。10月31日帰京A C
11 ・ 3	埼玉県川越で講演。4日帰京C
11 ・ 5	東洋大学、宮内省より再度恩賜金を受けるB C
11 ・ 11	東洋大学創立30周年記念式典A B C
11 ・ 12	30年前の日本哲学について記念講演C
11 ・ 15	東洋大学同窓会に出席C
11 ・ 16	東洋大学創立30周年記念講演会で明治年間の我哲学界について講演C
12 ・ 15	群馬、埼玉の2県を巡講。12月14日帰京A C
12 ・ 22	内田周平の還暦祝賀会に出席C
12 ・ 22	伊東温泉にて越年A C

『奮闘哲学』C E (Cは「5月」、Eは月なし)

『未知句齊集』C E (Cは「6月」、Eは月なし)

『新記憶術』C E (Cは「8月」、Eは月なし)

12月末

哲学堂会計報告、三、一四九円〇四銭
余C

一九一八年

(大正7年) 61歳

群馬県を巡講。1月16日帰京AC

遺言状を起草C

1・11

東洋大学創立30周年記念および謝恩の

1・12

ため勝海舟、加藤弘之、寺田福壽の墓

1・28

に詣でるAC(ただしCは「加藤弘」

銚子へ漫遊に出発AC。2月5日帰京

C

2・15

尾張地方を巡講。3月9日帰京AC

京北中学校卒業式に出席AC

3・10

尾張地方を巡講。3月29日帰京AC

3・11

東洋大学卒業式に出席AC

3・30

和歌山県を巡講。5月21日帰京AC

4・1

朝鮮総督府の嘱託により朝鮮を巡講。

5・24

7月21日帰国AC

『焉知詩堂集』CE(Cは「2月」、
Eは月なし)

7・25	青森県を巡講。9月6日帰京A C		
9・17	伊豆長岡温泉で静養、後に同地方を巡講。10月12日帰京A C		
10・13	東洋大学学長の送迎会に出席C		
10・14	栃木県を巡講。11月11日帰京A C (Cには「栃木、福島の両県」)		
11・18	南条文雄の病氣を見舞うC		
11月末	護国団総会で世界大戦の觀察を講演C		
12・1	湯河原温泉へ行く。12月14日帰京C		
12・10	大内青巒の葬儀に出席C		
12・16	日比谷公園の休戦祝賀会に出席A C		
12・21			
一九一九年	(大正8年) 62歳		
1・16	葉山へ遊ぶA C		
2・3	「教育上私立学校に対する卑見」を朝		
	『大正小談語』(1月) C		
	『哲学唱念和讃』(1月) C		
	『哲学改悔文』(1月) C		
	『南船北馬集』15号 C		

2 ・ 12	3 ・ 9	3 ・ 16	3 ・ 25	5 ・ 5	5 ・ 5	6 ・ 12	6 ・ 17	6 ・ 22
日新聞に掲載C	静岡県を巡講。3月8日帰京AC	京北中学校卒業式に出席。後に静岡県の巡講に出発。3月24日帰京AC	東洋大学卒業式に出席。後に静岡県の巡講に出発。4月3日帰京AC	上田万年の病氣を見舞うC	中国、満州の巡講に出発AC	大連の西本願寺付属幼稚園に午後8時着。8時35分より戦勝の結果と戦後の経営について講演をはじめ。講演中脳溢血を起し、6月6日午前2時40分逝去ABCEMO	大連の真宗大谷派別院にて葬儀を行うAC	遺骨東京着AC
								東洋大学葬を挙行ABC
								和田山蓮華寺に埋葬。戒名「甬水院釈円了」A

『真怪』CE（Cは「3月16日」、Eは月なし）

研究会日誌

(一九七八年～一九八三年)

一九七八年(昭和五十三年)

十一月十三日 第一回研究会(甫水会館)

○研究会発足までの経過説明

○基本方針——東洋大学創立百周年までの十年間を活動期間として、第一次五ヶ年計画と第二次五ヶ年計画にわけて研究目的を達成する(ただし、井上円了学術振興基金運営委員会(以下、運営委員会とする)では研究期間を三ヶ年としているために、十ヶ年計画を三年間くぎりで位置づける。)

○研究代表者を田中菊次郎とし、研究計画・組織・テーマについて検討

一九七九年(昭和五十四年)

一月二十二日 第二回研究会(甫水会館)

○個人別研究課題の紹介

○『井上円了書誌』(山内四郎担当)の配布と説明

○井上円了の著述の中で東洋大学付属図書館に未所蔵のものを購入またはコピー化し、神田寺所蔵の明治仏教関係雑誌をマイクロフィルムに収録

二月二十二日 第三回研究会(甫水会館)

○運営委員会よりの通達——研究会の名称「井上円了学術総合研究会第三部会」、研究テーマ「主として井上思想の基礎となった国内においての実証的研究」

○『井上円了略年譜』(三浦節夫担当)の配布と説明

四月六日 第四回研究会(甫水会館)

○研究報告——田中菊次郎「政教社のナショナルイズ

ムと井上四了の「護国愛理」

○針生清人・山内四郎による立命館大学および同志社大学の井上四了関係資料調査の報告

六月十一日 第五回研究会（甫水会館）

○研究報告——世良民平「井上四了の人間像」

○前回の「井上四了関係資料調査」の報告書の配布

一九八〇年（昭和五十五年）

一月二十一日 第六回研究会（甫水会館）

○田中菊次郎・高木宏夫・三浦節夫による「新潟県越路町慈光寺調査」および「兵庫県竜野市善竜寺調査」の報告と資料配布

○井上四了関係文献の収集について討議

六月十六日 第七回研究会（甫水会館）

○田中菊次郎・高木宏夫・三浦節夫による「新潟県柏崎市光賢寺調査」の報告と資料配布

○世良民平による「小泉八雲と井上四了」に関する新聞資料の紹介と配布

○研究報告集の発行について討議

○「井上四了の書の研究会」との交流を積極的にすすめることを決定

七月十八日 第八回研究会（甫水会館）

○研究報告——山内四郎「明治時代の雑誌にあらわれた井上四了評」

○マイクロフィルム資料の紹介

九月十九日 第九回研究会（甫水会館）

○研究報告——針生清人「四了哲学理解のための二、三の問題について」

○田中菊次郎による「熊本県・新潟県・山形県における井上四了に関する調査」の報告

一九八一年（昭和五十六年）

一月十六日 第一〇回研究会（甫水会館）

○研究報告——井上民雄「井上家文書について」

○今回は井上田了合同研究会（第一部会と第二部会も参加）の形で開催され、報告終了後に、今後の研究体制について討議

三月二十日 第一一回研究会（東洋大学第一会議室）

○研究報告書『井上田了研究』第一冊の発行と配布

○井上田了関係資料の復刻について討議

○来年度より各個研究から総合研究へと発展させるために、井上田了の教育理念に関する資料を復刻することを決定

五月二十六日 第一二回研究会（甫水会館）

○研究資料『井上田了研究』資料集第一冊の発行と配布

○研究代表者が高木宏夫にかわる

○高木宏夫・三浦節夫による「宮崎県都城市の佐々木正憲氏に関する調査」の報告

十月六日 第一三回研究会（甫水会館）

○研究報告——高橋統一「井上田了と河口慧海」

○研究報告——西山茂「井上田了と蓮門教——島村ミツとの三つの関連——」

○東洋大学創立百周年と井上田了研究との関係について討議

一九八二年（昭和五十七年）

二月十六日 第一四回研究会（甫水会館）

○『井上田了研究』資料集第二冊として『甫水論集』（明治三十五年刊行）、同資料集第三冊として『田了講話集』（明治三十七年刊行）をそれぞれ復刻して配布

○来年度より前記の資料集を基礎に「井上田了の教育理念に関する総合討議」を行うことを決定

○運営委員会へ提出する第二次三ヶ年計画について、第三部会は研究発足時の十年間の継続研究という方針に基づいて立案

* (付記、昭和五十七年度の研究会活動は、運営委員会による第二次三ヶ年計画の承認を得られなかったために、総合研究や資料収集などの活動ができず、各個研究をすすめるにとどまった。)

一九八三年 (昭和五十八年)

六月一日 第一五回研究会 (甫水会館)

○研究報告——飯島宗享「井上円了の教育理念(その1)」

○第二次三ヶ年計画にいたるまでの経過説明

七月六日 第一六回研究会 (甫水会館)

○研究報告——小林忠秀「井上円了の啓蒙思想」

○今年度をはじめとする第二次三ヶ年計画に関し、つぎの三点を決定

一、総合を重点とした各個研究成果の討議

二、総合研究の一環として、井上円了とその周辺に関する年譜ならびに関係文献のコンピュ

ーターによる情報検索に着手

三、日本近代に関する哲学・思想関係資料のデータ・バンクづくりの検討・討議に着手

九月二十八日 第一七回研究会 (甫水会館)

○研究報告——小林忠秀「井上円了の思想——甫水論集、円了講話集について——」

○『井上円了研究』第二冊の刊行について討議

十月二十八日

○第一回井上円了学術総合研究発表会 (甫水会館) に
おいて、第三部会は、小林忠秀「井上円了の思想」を発表

十一月三～五日 第一八回研究会(東洋大学箱根保養所)

○研究報告——飯島宗享「井上円了の教育理念(その1)」

○井上円了およびその周辺資料に関するコンピュータ処理について、年譜関係は水沢清之の担当、書誌関係は三浦節夫の担当を決定

あとがき

昭和五七年度の研究費が中断したために、研究誌の発刊ができませんでした。今年度の刊行予定日より大変遅れましたが、第二号ができました。筆の早い方と遅い方と、極端なちがいがあって苦労しました。

第3部会では、部会内総合研究の討議資料として、『井上円了研究—資料集』を3冊複製刊行してきましたが、本号では、その資料を元とした研究報告が中心となっています。研究報告は、「研究会日誌」記載のように、月例会の形で行われました。それは各個研究の中間報告で、終ってすぐワープロによるテープ起しをし、そのコピーをとり敢ず研究員に配って、討議資料

として消化した上で次回の研究会に臨めるようにした結果、総合討議への逐次移行部分が生まれました。この総合討議は、二泊三日の合宿でも集中的に行われ、早朝から深夜までの討議で、食事だけが休みという状況でした。この討議内容の要約だけでも本誌にという意見もありましたが、紙面の都合で、本号では割愛しました。

(高木宏夫記)

井上円了研究 (第2号)

昭和59年3月8日 印刷

昭和59年3月14日 発行

発行所 東洋大学
井上円了研究会第三部会

印刷所 福音印刷

東洋大学

井上円了研究会

第三部会